

マイ・フェア・プレジデント

M a b o & M a s a k i

小日向江麻

Ema Kobinata

termity



エタニティ文庫

午後六時——終業の時刻を迎えると、私はまとめておいた荷物を手にしてすかさず席を立った。

「お先に失礼します」

「お疲れさま——あ、ねえねえ、ありけら有村さん」

頭を上げたところで、同僚の女性に声をかけられる。

「このあとご飯でも食べに行こうかって話してたんだけど、良かったらあなたもどう?」
彼女の背後には数人の女性社員が輪を作り、就業時間中とは違うリラックスした表情で歓談していた。金曜の夜ともなれば、そういう流れになるのも自然だろう。

「すみません、ちょっと用事があります」

「そう、残念だわ。じゃあ、またの機会にね。お疲れさま」

「ありがとうございます。お疲れさまです」

私はもう一度頭を下げると、このあとの予定をあれこれと楽しそうに語り合う彼女た

ちを尻目にエレベーターホールへと向かった。

「有村さん、やっぱり帰っちゃったんだー。相変わらず付き合いい悪いよね」

途中で若い女性特有のよく通る声^{こゑ}が耳に届いたけれど、聞かなかったことにしてオフイスを出る。

時折冬の寒さが顔を覗かせる十一月は、日が落ちるのも早い。忙しさにかまけていると、あつという間に日々は過ぎていく、と眩しくもないのに目を細めた。

毎日同じ時間に通るこの道だつてカレンターを捲るたび、肌^みに感じる空気^{まぶ}の冷たさや木々の葉の色なんか^{もみぢ}が確実に変わっていくのだ。

そんな季節の移り変わりに思いを馳せながら、ハンドバッグから携帯電話を取り出し、リダイアルの一覧から「フェリア〈事務所〉」という項目を探して通話ボタンを押す。

「はい、『フェリア』です」

「もしもし、お疲れさまです。レイナです」

ぴつたり、コール二回分待つてから出たのは少し高めでクリアな男性の声。

三上^{みかみ}さんだ。

「今から向かいます。七時前には着くと思えますので、よろしくお願いします」

『はいはい、了解。待ってるよ』

ブツツ、という小気味いい音で通話が切れたのを確認してから携帯をたたみ、再びバ

ッグに押し込むと、私は時間を気にしながら駅までの道のりを駆けていった。

勤務先の最寄り駅であるJR吉祥寺駅から中央線に乗り、丸の内線に乗り換えて十分とちよつと。乗換えや徒歩の時間を含めて五十分もあれば、事務所のある銀座にはゆうに辿り着くことができる。銀座の外れにある雑居ビルの一室のインターホンを押してから、私はそのドアを開けた。

「おはようございます」

「おはよう、レイナ」

ドアの正面にある奥のデスクで、何やら書類と睨めっこしていた三上社長が、私の挨拶に顔を上げた。

朗らかな笑みに隠された猛禽類^{もうじゆうるい}のような眼光の鋭さが、いかにもやり手といった風。

年齢はまだ三十代後半だと聞いた。褐色に近い肌とセンターパートの黒髪、そして何といてもドギツイシルバーのスーツが、派手好きな印象を与える。

「今日の店はまだ決まってるないんだ。ちよつと準備して待つてて」

「はい、わかりました」

社長に頷きを返しつつ、既に何足かのブーツやパンプスが脱ぎっぱなしに置かれた玄関口で、私は履いていたパンプスを脱いで端によせた。

デスクの手前には、旅館の宴会場のように長々と白いローテーブルが並んでいる。そのテーブルの上にはヘアスプレーやドライヤー、ホットカーラーにコテなど、ヘアメイクに必要なありとあらゆる物が置いてある。

「あ、レイナさんだ。おはようございますー」

明るい声に視線を向けると、テーブルの一角で綺麗なミルクティー色の髪を梳かす女性の姿があった。流行りのモテ系ファッション誌から、そのまま飛び出てきたような彼女。「ユリちゃん。おはよう」

その子の名前を呼び、私はそのまま彼女の隣に陣取った。

「今日は早いなだね」

「そうなんですよー、今日は午後の講義がなかったから暇で。行くところもなくなっちゃったから、事務所まで時間潰そうかなって」

人懐っこい笑顔を浮かべ、ブラシを動かしながら彼女が答える。

「そっか、そういえば大学生だったけ。授業のあとにこういう仕事って、大変じゃない？」

ユリちゃんはホットカーラーを電源タップにセットしながら首を横に振った。

「全然。人と話すのって嫌いじゃないから。むしろ楽しんでやってるくらいです」

「そうなの」

「それを言うならレイナさんの方がよっぽど大変だなって思いますよ。レイナさん、昼

間も働いているんでしょう。何のお仕事でしたっけ？」

「事務だよ。派遣だけだね」

私は小さく笑いながら、オフィス仕様にまとめていた髪を解き、テーブルの下に無造作に積まれていた鏡を取り出して手前に立てた。

「ダブルワークってことですよね。すごいなあー」

「すごいってほどでもないけど……派遣のお給料だけじゃ心許なくてね」

「でもキツくないですか？ 私みたいに学生なら、どうしても疲れたときとかは講義中に睡眠とったりできますけど。社会人だと大変そう」

自分には無理だと言わんばかりに首を振った彼女の瞳には、くつきりと存在感がある。つけ睫毛なのか、毛先がくるとカールしていて、まるでお人形さんみたいだ。

「最初は大変だったけど、今はどうにか慣れたかな」

「ホントですかあ？ しかもレイナさんと私って結構会いますよね。今週はどれくらいシフト入ってるんですか？」

「今週は週五かな」

「週五!?!」

ユリちゃんは信じられないというように、そのお人形さんのような愛らしい瞳を丸くした。そして、ヘトヘトに疲れたような顔をする。

「レイナさん、よく身体持ちますね。この仕事好きだけど、私だったら無理だなー」
「だから、慣れだよ慣れ。私にとってはこれも生活の一部になりつつあるから」

「そんなあ。それじゃ、友達とかカレシとかと会ったりする時間ってどうしてるんです？
やっぱり、週末中心になっちゃうんですかね？」

「……そんなところ、かな」

さも当たり前のようにそう訊かれると、一瞬返答に困ってしまう。けれど、私は会話が途切れないように曖昧な言葉^まを返した。

「ユリー、ちよつと！」

そのとき、助け船のように社長の声が降ってきた。

「はーい。つと、レイナさん、ちよつとごめんさい」

ユリちゃんは軽く頭を下げながら立ち上がり、社長のもとへ向かった。

三上さんが社長を務めるこの『フェリア』は、銀座エリア限定の人材派遣サービス会社だ。派遣先は、主に銀座のクラブやスナック、ガールズバー。早い話が、夜の蝶ということだ。

普通、ホステスっていうのはお店に籍を置くものだけど、『フェリア』の場合は会社籍があり、依頼があった契約店に時間単位で仕事をしに行く。

お店に雇われて働くのと違ってノルマや残業がなく、勤務時間も自分で選べる手軽さ

から、フリーターはもちろん学生や会社員も多く在籍している。

レイナこと私もその中で一人で、昼間は派遣事務として働きながら、週に四、五回『フェリア』に出勤しているのだ。

ユリちゃんが席を離れている間に、温めていたカーラーで髪をアップスタイルにしていく。つまり「盛る」。

お店で働いている子は美容院できちんとセットしてもらってから出勤するものだけど、私たち派遣スタッフは自分でやらなければいけない。

しかも、派遣されるお店によってはかなりボリュームを出して派手に盛らなければいけない。私は手先が不器用なので、身につけるまで結構大変だった。

でもまあ、この仕事を始めて二年も経てば嫌でも覚えるもので、今では新しく入った子のフォローもできる。この仕事以外では役に立たないのが残念だ。

ヘアのトップをアメピンで留め、難なくセットを終えると、次はドレス選び。派遣されるお店の雰囲気にあったものをチョイスして、パーティションで区切られた更衣室で着替える。

私はまだ今日の派遣先が決まっていないので、どんなお店にも合いそうなシンプルなものにしてみた。通勤用のニットアンサンブルとツイードのタイトスカートを脱ぐと、爽やかなライトブルーのワンピースドレスに着替え、傍に立てかけてあった姿見を覗く。

ストラップに付いたコサージュと、ウエストのリボンベルトが可愛いそれは、つやつやしたサテンの肌触りが心地いいこともあり、選ぶことが多い。

「レイナさん。社長が呼んでますよ」

「わかった、ありがとう」

入れ違いに更衣室で顔を合わせたユリちゃんにお礼を言うと、今度は私が社長のもとへと向かう。

「レイナ、今日は『アンジュ』から指名が入ったから」

社長のデスクに行くと、彼は開口一番にそう言った。

「わかりました」

「伊織ママがいつも助かってるってさ。いい店だから大事にしろよ」

「はい、もちろん」

『アンジュ』からは週に一度は呼んでもらっている。一日ごとにお店が変わるのがスタッフ派遣のルールなだけけど、店側は気に入った女の子を指名という形で再度呼ぶことができる。指名されたスタッフには指名料が出るので、スタッフにとっても美味しい話なのだ。

『アンジュ』のママである伊織さんは私を気に入ってくれているらしく、お客様の中には私のことを本当に『アンジュ』の女の子だと思っている人もいるだろう。

もともと派遣スタッフには、お店にいらつしゃるお客様に自分が派遣であることを明かしてはいけないという規則があるから、そう思われて当然なのだけれども。

テーブルに戻ってユリちゃんと少し雑談を交わし、ふと腕時計を見ると長針が到着時からちようどぐるりと一周したところだった。

私のシフトはいつも八時から十一時の三時間。そろそろ出勤の時間だ。

「もうそろそろ行くね。ユリちゃんはどうする？」

立ち上がりながら私が訊ねると、彼女も腕時計で時間を確認する。

「今日は歩いてすぐのお店なんで、あとちよっとだけ時間を潰してから行きます」

「そっか。じゃあお先に」

手を振る彼女と別れ、ハンカチなどの仕事道具が入ったポーチを手に事務所を出た。

銀座という狭い範囲での移動とはいえ、余裕を持って行動するに越したことはない。

一週間の仕事疲れが垣間見えるサラリーマンや、ディナーデートに向かうカップルたちの横をすり抜け、キラキラとしたネオンに導かれるように『アンジュ』を目指した。

「お疲れさまです」

「いらつしゃい、レイナちゃん。待ってたわ」

『アンジュ』は高級ブランドショップが並ぶ並木通り沿いのビルの最上階にある。お店

に着くと、薄暗い店内から歓談が聞こえてきた。

水商売は不景気の煽りを一番受けやすい業種で、最近では豊んでしまうお店も少なくないのだけれど、この店は別。この不況の中でも客足はさほど衰えていない。

ただの一派遣スタツフとして働く私でもその理由はわかる気がする。純粹に、とてもいいお店なのだ。

黒服の男性は愛想がよく気も利くし、ギスギスしがちな女の子同士の関係も良好。何より、どんなときでも満面の笑みで迎えてくれる伊織ママを慕うお客様は多い。

女優風の艶やかな容姿もさることながら、魅力的なのはその人柄だ。お客様のほとんどは、伊織ママに会い、癒されるために、高額なセット料金を払って、ボトルを入れる。銀座のママの中にはお客様のないところで、女の子に当たるような人もいる。派遣ともなれば特に苛立ちの捌け口になりがちなのだけれど、伊織ママはお店の子と派遣を差別することはなく——ううん、むしろお店の子以上に気を遣ってくれている。「今の席大丈夫だった？」とか、「嫌な思いはしなかった？」なんて訊いてくれる、本当に優しい人なのだ。

「今日も呼んでもらえて嬉しいです」

私がお礼を言うと、ママはえんじ色に蝶をあしらった品のいい着物の袖を少しくし上げ、指先を口元に添えながら、

「いえいえ。こちらこそいつも助かってるわ。本当、うちで働いてほしいくらいよ」

と笑った。何回かそう言われたことがあるから、あながち冗談でもないのかもしれない。「で、早速なんだけどね、一番奥のテーブルについてもらっていいかしら？」

「はい」

私は快く頷き、そのまま彼女の示すテーブルに向かった。そのテーブルには、お客様二人に対して女の子も二人。ちょうどいい割合なのに私を足したということは、どちらかがじきに抜けてしまうのかもしれない。

「お話し中失礼致します」

会話の切れ目を見計らって、私はボックス席の端に、空いた丸椅子を引き寄せながら明るく声をかけた。

「はじめまして、レイナです。お邪魔してもよろしいでしょうか？」

「ああ、どうぞどうぞ」

ボックス席の奥で足を組んで座っていたほろ酔いの男性が、大きく私を手招いてくれる。年齢は四十代半ば、だろうか。わずかに白髪之交じった髪と、笑うと目元や口元に刻まれる皺しわを見て何となくそう思った。

「ワタナベさん、レイナちゃんもお酒をいただいても構いませんか？」

すかさず彼の隣に座る赤いドレスのお姐さん——確か名前はミカさん、だったと思

う——が、微笑を添えて訊いてくれる。断られることはまずないので形式的なものだけれど、勝手にいたたくわけにはいかない。

「もちろん。美人が増えると華やかでいいな、マサキ君」

「そうですね」

男性は快く頷き、対角線上に座る別の男性に呼びかけた。私もそちらに顔を向け——視線の先にいた彼の姿に釘付けになる。

こういうお店に来るにはかなり若い方なのではないかと思う。おそらく年は三十歳前後……どうだろう、もしかしたら私と同じ二十代半ばということもあるかもしれない。

落ち着いた声音のせいなのか、場の雰囲気には溶け込んでいるのだけれど、ここは会員制で、いわゆる「見さんお断り」の高級クラブなので、彼のような若い人がやってくるのは珍しい。

「……レイナちゃん？」

「あ、ありがとうございます」

ほんのわずかな間だけれどマサキ君と呼ばれた彼から目を離せないでいた私は、彼の隣に座っていたピンクのロングドレスを身にまとったお姐さん——こちらは、サクラさん——から水割りの入ったレディースグラスを受け取った。

「じゃあすみません、もう一度乾杯させてくださいね」

グラスに両手を添えて少し掲げてみせると、四つのグラスも集まってきて、涼やかな音を立てる。

私はグラスに口を付けながら、もう一度マサキさんを見た。

意志の強そうな直線的な眉をしているわりに柔和な眼差しが印象的な彼は、鼻筋のストツと通った彫りの深い顔立ち。なかなかの美形だ。主張しないスマートショート黒髪が爽やかで誠実な印象を抱かせる。

続いて首から下に視線を向ける。線は細めだがつりしているところまではいかないけれど、引きしまった身体をしているのはスーツの上からでもわかった。何かスポーツでもしているのかもしれない。

同じ会社に彼のような男性がいたら、さぞかし人気が出るのだろうなと思った。同時に、私が彼に想いを寄せる女性の一人になってもおかしくはないな、とも。

私生活で年の近い男性と接する機会が極端に少ない私は、そういう人と同じテーブルにつくだけで妙に意識してしまう。

「……レイナさんは」

視線を感じたのだろうか。マサキさんはグラスをテーブルに置いてから、私に向けて言った。

「名刺はお持ちじゃないのですか？」

ホステスに対しては丁寧すぎるくらい口の調。私が来る前にそういうやり取りがあったからだろう。

「ごめんなさい。レイナちゃんは、名刺を切らしてるんですよ。ね？」

私が口を開くよりも先にサクラさんが答え、私に目配せをする。

「はい、申し訳ありません」

彼女の言葉を受け、私はすまなそうに言ってみせた。

派遣スタッフがお客様に名刺を渡したり、逆にお客様から名刺をいただいたりするの禁止されている。いらっしやったお客様はあくまでそのお店のお客様であり、私個人の顧客にしてはいけない。そういうルールなのだ。

だから名刺について訊ねられたときは、入店したばかりでまだ作っていないと答えることになっているのだけど、私の場合は、よく『アンジュ』に呼ばれていて顔見知りのお客様もいるので辻褄が合わなくなってしまう。そこで、ママや黒服の人と相談してこのフレーズを使うようになった。

「そうなんですか。残念ですね」

「何だい。彼女が気に入ったのか、君は？」

奥の男性が茶化すと、マサキさんが照れたように小さく笑う。

「素敵だなあと思っています」

社交辞令かもしれないけれど、素敵な人に「素敵」と褒められて、私の鼓動はほんの少し速まった。自分の単純さがおかしい。なんだかきまり悪くなって、誤魔化すみたいに入割りを飲み干す。

当たり障りのない会話を交わすうちに、ワタナベさんとマサキさんは直接のお友達ではなく、共通の人物を介した知り合いだということがわかった。

四十代のワタナベさんは会社を経営しているらしい。特別お酒が好きというわけではないようで、グラスの中身はさほど減らない。どうやらお酒を飲む空間に酔うタイプらしく、声高に笑いながらお姐さんの肩に触れたりして上機嫌だ。

対してマサキさんのグラスは、頻繁に注ぎ足されている。減りが早いわりに様子が変わらないところを見るとお酒に強いのだろう。かなり飲んでいるはずなのに、姿勢のいい座り方やグラスに添えた指先の所作が美しく、育ちの良さを感じた。

この仕事を始めてから気づいたのだけれど、お酒の嗜み方には普段の人間性が出るみたいだ。この店には滅茶苦茶な飲み方をするお客様はいらっしやらないけれど、絡まれて困ることがないわけではない。接待する側の人間としては上品に飲んでくれるお客様を好んでしまうものだ。

そういう意味ではマサキさんは模範的なお客様なので、自然と彼への好感が増した。

「昔は何が何でも仕事が一番だったんだが、年を取るとそういうがむしやらな部分があ

くなつてダメだなあ」

時間の経過と共に顔の赤みが増したワタナベさんが、唐突にそんな言葉を口にした。

「やだあ、ワタナベさん、まだそんなお年じゃないでしょう？」

ミカさんが、赤いドレスの裾を引いて座りなおしながらクスクスと笑う。

「いやいや、若さつてのはな、生きていく上で一番重要だよ。女の子は特にそうじゃないのか？」

こういう話題は心臓に悪い。

女性というのは皆そうだけれど、特に水商売をしているお姐さん方は年齢の話に敏感だ。ほとんどの場合、稼げるのは若いときの一瞬。だから、お姐さん方はいかにして若いうちにお客様を多く獲得し、自分のお店を持つことに繋げるかというプランを立てている。年を取れば容姿でお客様を惹きつけることは難しくなるからだ。

私は二人のお姐さんの表情を盗み見たけれど、別段気にした様子はないようでホッとした。まあ、仕事でだし不機嫌な態度を見せるのはよろしくないということは、彼女たちも重々承知しているだろう。

「うふふ。確かに、若い女の子の方が好きだって方も多いですけど、成熟した女性っていうのもいいものですよ？」

なんて、笑顔で切り返しているあたりはさすがといったところ。

「なるほどねえ。それなら君は、生きていく上で一番重要なモノって何だと思う？」

ワタナベさんはグラスの水割りを舐めるように飲みながら、ミカさんにごく軽く問うた。

「んー、さうですねー。恋人がいるときは恋人、かなあ。私、いつまでも女性でいたいんで彼女を考える素振りを交えつつも、これ以外ないといった口調で答えた。なかなか情熱的で王道な回答だな、と思う。一見ありふれた回答の中にも、身にまとった赤い色のドレスに負けない、一途さみたいなものが垣間見えた。

「私だったら友達ですかね。恋人っていうのもいいけど、フラれちゃったら終わりだし。友達なら、一生続くでしょう？」

続いてサクラさんも答える。これも鉄板な回答で納得する。

「君はどう？」

流れで、同じ質問が私にも回ってきた。

「……ええと」

お酒の席での他愛ない会話。真剣な回答を求められているわけでもないのだから、適当に答えておけばいい。でも変なところで真面目な私は、こういう場合、真剣に悩み、本気の答えを出してしまう。

「……お金、かなあ、と」

正直に、常々、痛いほど感じていることを告げると、ワタナベさんは一瞬きよとんとした顔をした。そして弾けるように「わはは」と大きく笑い出す。

「いいね、面白いよ、君。実に素直じゃないか。なあ、マサキ君」

ワタナベさんが楽しそうにマサキさんへと振ると、彼は無理に笑いを貼りつけたような顔で「ええ、まあ」と答えた。

瞬間的にまずいと感じ、お姐さんたちの顔を窺い見る。困ったような、呆れたような……微妙な表情だ。

自分がハズしてしまったことを知った私は、その発言を悔いた。確かに無粋な意見だったかもしれない。そういう率直さを出しても問題ないキャラクターの人が面白おかしく言えば、場が盛り上がったのかもしれないけれど、私みたいにヘルプ役の大人しいタイプの人間が言う台詞としては、直球すぎた。

幸い、ワタナベさんにはそれが笑いのネタになったらしく、場の雰囲気に影響はなかったけれど——マサキさんの反応はイマイチなように思えた。

こういうお店で働いていることもあって、ガツガツしている女だと思われたかな、なんて落ち込みかけたけれど、すぐに気にする必要はないと思いついた。

いくら減多に現れないような若くてカッコいいお客様だからって、所詮私はただのヘルプ、彼はお店のお客様だ。ただそれだけの関係。印象を悪くしたのはそれなりに気に

なるけど、仮に悪い印象を与えたとしてもそれは私個人に対するものであって、お店のイメージを壊すほどではないはず。

私はそれ以降、極力余計なことを言わないよう、聞き役に徹したのだった。

「本日はありがとうございます」

「下にタクシーを呼んでありますので、ご案内しますね」

ミカさんと伊織ママがそう言って、クロークで保管している男性二人の鞆を取りに行く。お帰りの時間になったのだ。

結局、私はずっとあのテーブルで接客をしていた。ともすれば場が白けかねない失態を犯したものの、お客様やお姐さんたちの機嫌は損なわなかったようで一安心だ。

時刻を確認すると、ちょうど、夜の十一時を迎えようとしていた。ようやく胃が引き攣れそうな思いから解放される。

「レイナちゃん。こちらをお客様にお渡しして」

「はい」

あのあと、サクラさんのお客様がいらしたので、彼女が抜けて私がマサキさんの隣にいた。黒革の鞆を伊織ママから預かり、持ち主である彼に向き直る。

座っているときはわからなかったけれど、こうして立った姿を見ると結構長身なんだ

な、と思う。一七五センチ、ひよっとしたら一八〇センチくらいあるのかもしれない。

「……あの、お鞆、どうぞ」

「ありがとうございます」

私が失言したときの彼の微妙な笑みを思い出してしまふ。

あのあと、彼からの視線を頻繁に感じるようになった。多分、私が「一番大切なのはお金」だなんて強欲なことを言ったからだだろう。それくらいしか理由が思いつかない。

私への印象が悪くなっても構わないとは思ったものの……短い時間でも一緒にお酒を楽しんだ人に不快感を持たれるのは、やっぱりこたえる。

俯きがちに鞆を差し出すと、彼は丁寧にお礼を言いながら片手で受け取った。

そして——もう片方の手で、たった今鞆から離れた私の指先を握る。

「……？」

まるで握手でもするような所作で手のひらに触れ、何かを押し込めるようにしてすぐに遠ざかる。残ったのは彼の手の温もりと、何か乾いた感触。

……これは、何？

困惑する私の耳元で、彼が静かに囁いた。

「レイナさん、あなたと大事な話があった。ご迷惑でなければ連絡をください」

それだけ告げて、彼はバツと私の傍から離れた。おそらくミカさんやママの目を気に

したのでろう。私も慌てて彼女たちに目を向けたけれど、二人はワタナベさんと盛り上がっているようで、私たちを気にする素振りはなかった。

『ご迷惑でなければ連絡をください』

マサキさんが私に渡したものの……これって、もしかして。

私は自分の身体の陰で、そっと手の中のものを見込んだ。

小さく折りたたまれたメモ用紙を開くと、ゼロから始まる十一桁の番号が並んでいる。

………思ったとおり、携帯の番号だ。

「では、お見送りをいたします」

ミカさんが二人を連れてエレベーターホールへ向かう。予想外の出来事に動揺しつつ、私も付いていこうとしたところで伊織ママに呼びとめられた。

「レイナちゃん、お見送りはいいわ。時間でしよう、帰って大丈夫よ」

「あ……すみません、それじゃそろそろ失礼しますね」

「お疲れさま。ありがとうございます」

ママは劳いの言葉をかけてくれながら、にこりと微笑を浮かべた。そして、お客様の待つ他のテーブルへ向かおうとする。

「あ、あの」

ママを呼びとめると、彼女が不思議そうに振り返る。

用事は一つしかなかった。「先ほどのお客様からいただきました」と一言添えながら、このメモをママに渡すこと。

派遣スタッフには、お客様に名刺を渡してはいけないというのと同様に、お客様からいただいた名刺や連絡先などをお店に渡さなければならないというルールもある。

このルールは徹底されていて、以前、酔ったスタッフがうっかり名刺を持ち帰ってしまったときには、三上社長から「次やったら除籍な」と厳しく言われていたつけ。

だから、どんなに飲んでも、もらったものは絶対に渡してこよう——そう思っていた、はずだったのだけ。

「……………」

どうしてか、このメモをママに渡す踏ん切りがつかないでいる。

何故なのかは自分でもわからなかった。今までだって名刺や連絡先を渡してくる男性はいた。でも、その都度ママに渡してきたというのに。

「レイナちゃん？」

「……………あの、今のマサキさんって方、よくいらっしやるんですか？」

間に合わせのように零れた言葉に、ママが首を振って答えた。

「いいえ、初めて見たわ。ワタナベさんのお知り合いってことでいらっしやっただけれど……………それがどうかした？」

「い、いいえ。何だか、随分若い方だなと思ったので」

「そうよね。私も珍しいと思ったわ」

どうやらお店の常連ということではないみたいだった。

「……………そうだ、レイナちゃん、やっぱりうちのお店に来るのって難しい？」

「え？」

ママが不意に真面目なトーンで切り出すものだから、私はきょとんとしてしまった。

「前々から冗談めかして言っていたことなんだけど、『フェリア』を辞めてうちで働くっていうの、真剣に考えてもらえないかしら。レイナちゃんは真っ直ぐでいい子だし、気も利くし、お客様の評判もいいし……………うちのお店にも合ってるんじゃないかなって思うのよ」

「……………」

「昼間は別のお仕事をしていて忙しいことも知ってるわ。でも、うちのお店にもそういう子はいるし、きつとレイナちゃんなら大丈夫だと思うの、だから」

「ママ、ごめんさい」

私は彼女の言葉を遮るように言いながら、頭を下げた。

「このお店はすごく働きやすく、私も大好きです。でも、派遣をやめてここで働くのは契約違反ですし……………それに、派遣で働く今のペースが私にはちょうどいい気がする

んです。お気持ちは本当に嬉しいのですが、申し訳ありません」
 お店側が派遣スタッフをスカウトするのは規則で禁止されている。許可してしまうと、派遣会社から仕事のできる女の子がどんどん引き抜かれていってしまうからだ。

もし見つけた場合、その店舗との契約を切るようなこともあるらしい。伊織ママは、そのリスクを承知の上で声をかけてくれている。それは、とてもありがたいことなわけだ……

私ともう一度頭を下げると、ママは残念そうにため息を吐いた。

「そう。そうよね。困らせちゃってごめんなさい。レイナちゃんの立場もあるでしょう。でも、もし気が変わったらいつでも言ってるね」

私はママの優しい微笑みに幾許かの後ろめたさを感じつつ、『アンジュ』をあとにした。

事務所に戻り、着替えと勤務報告を済ませ、駆け足で電車に飛び乗ったのは十一時三十分過ぎだった。

私の自宅は埼玉にあるから、事務所からの帰宅には地下鉄ではなくJRを使用する方がスムーズだ。銀座から程近い新橋駅のホームは、こんな時間にもかかわらず列ができるほど混雑していた。

電車に乗ると、私はドアの横に寄りかかって大きく息を吐く。

……今日もやっと終わった。解放感に浸りつつ、仕事せずと触れていなかった携帯電話を開く。

新着メールが一通、不在着信が一件。いずれも大学時代の友人である香織からだ。

とりあえずメールの内容を確認してみる。

『やっほお☆ 前に話してた合コンだけど、やっぱ真帆も来なよー。ていうか来てよー。至急連絡求む！』

前に話してた合コン……ああ、そういえば誘われて断ったんだっけ。

友人からの連絡とはいえ、仕事後の疲れもあり、私はゲンナリしていた。

香織は合コンや飲み会が大好きで、よく友人たちに召集をかけている……のはいいのだけど、今の私にそれに参加するような気力は湧いてこない。

顔を上げ、ドアの窓越しに流れていく街の灯りを眺めた。

今週は五回、この景色を見ている。誰かが褒めてくれるだなんて微塵も思わないけれど、せめて自分がそうするくらいは許してほしい。

香織には『ごめんね、今気づいたんだけど、電車の中なの。四十分くらいかかっちゃうから、メールでもいい？』と送った。

連絡が来てから時間が経っているので、すぐには返事はこないだろうと思ったのだけれど、すかさず『降りたらでいいから、電話待ってるよー』という答えが届いた。

……メールで済ませたい、と思っていたのは内緒だ。観念して従うことを決め、携帯を閉じた。

携帯——そうだ。

バッグから仕事用のポーチを取り出し、小さく折りたたまれたメモ用紙を抜き出した。広げて手のひらに収まるほど小さい無地のメモ。その中央に、二ヶ所をハイフンで区切った十一桁の数字が書かれている。携帯の番号に違いない。

温かな感触と共にこのメモを渡してきた人物のことを思い出す。

——素敵な人だったな。容姿だけじゃない。穏やかで心地良い声音や丁寧な仕草、控え目な態度。私にはその全てが輝いて見えた。

そんな彼が連絡先を渡すなんて……どこにでもいるような、ただのホステスの私に。

「……………」

柄にもなく舞い上がっている自分に気づくと、自製の意味を込めて小さく首を振る。柄っつたら、何を勘違いしているんだらう。

考えるまでもなくわかることだ。きつと彼にとつては大したことじゃなく、ただ目の前に女性がいたから……反射的に渡しただけ。そういう男性が存在するってことも、この仕事で学んだはずなのに。

ホステスとして働いていると、そんな誘いを受けることもある。残念なことに、強引だつたりしつこかつたりするお客様もいて、嫌な思いをすることも少なくない。もちろん、そんなことが有り得るからこそその高額時給だつてことは理解しているつもりだ。

でも……何となく彼はそういう人たちとは違うような気がしていたのに。

「私ったら、バカみたい」

口の中で呟きながら、つくづくそう思った。

彼がどんな人かなんて、会ったばかりの私にわかるはずがない。

いくら男性に縁がないからって、彼がカッコいい人だつたからって、恋愛をする余裕なんてないくせに。お店の常連客じゃないならいいかな……なんて、持ち帰ってきてしまったけれど、やっぱりママに渡してくるべきだつた。

私は開いたメモをもう一度折たたんで、ポーチの中に戻した。

家に帰ったら処分しよう——きつと、もう会うこともない人だから。

そう決心したとき、電車が自宅の最寄駅に到着した。このあたりはベッドタウンなので降りる人たちの数も多い。改札をくぐりながら、早速、香織に電話をかける。

「もしもしー？」

ワンコールのあと、香織のハキハキとした声が聞こえてきた。

「もしもし、香織。私だけど」

「真帆、今日はデートか何か？」

最初の連絡ですぐに応答しなかったからだろうか。香織はからかうように訊ねた。

「ううん、まさか。友達と飲んでただけ」

ダブルワークをしていることは誰にも教えていない。学生時代は、いわゆる真面目なタイプを貫いていたこともあり、銀座のクラブで働いていますとは何とも言いづらいのだ。

「あはは、そっかー、そうだよね」

「そうだよねってどういう意味よ？」

失礼だなあ、と口を尖らせつつ言うと、香織は悪びれずに続ける。

「だって、真帆ってばいつも忙しそうで、それどころじゃないって感じじゃん？」

彼女の言葉は正しい。でも、それを素直に認めてしまうのは面白くない。

「別にその気がないわけじゃないよ。今の職場に出会いがないっていうのもあるし」

「あー、派遣事務だっけ。異様に女の人ばかりだっていう」

「そうそう」

「だ・か・ら・さあ。ねっ、合コン、しよ？」

まさに絶好のタイミングとばかりに本題を切り出されたので、私は苦笑した。

「うーん……私はいいいよ。遠慮しとく」

「遠慮なんてしないでよー。真帆、気いれくし優しいし可愛いからさあ、男の子ウケすつごいんだよね」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど……あんまり気が進まなくて」

「いいじゃない、合コンくらい。何もさ、会った人と絶対に連絡先を交換しなきゃいけないってわけじゃないし。軽くご飯食べて、適当に愛想振りまいて、ごちそうさまーって帰ってくればいいでしょ。運が良ければ、彼氏候補だっけ見つかるんだから、ねっ、美味しい話じゃん？」

「ごめん、香織。私、今はいいや」

「どうして？」

「どうしてって言われても……そこに割ける時間がないっていうか、割くつもりがないっていうか」

正直、そこに回せるエネルギーがあったら、夜の仕事のために蓄えておきたい……と思っけれど、口に出せるはずもない。

「……あのねえ真帆。あんた今いくつだと思ってるの？」

呆れたとばかりに、香織の声が一オクターブ下がった。

「わかってる？ 私たちもう二十五なんだよ、もう最初の曲がり角通過しちゃったんだよ。今はいいいとか言ってる場合？」

「……そ、それは」

「同級生だってそろそろ結婚し始めてるし、子供を産んでる子だっているんだよ。それなのに、彼氏の一人もいないって悠長すぎじゃない？」

「……」

「まさか一生一人でいるつもりじゃないでしょうね」

「そんなことは」

「淡泊にもほどがあるよ。そうじゃなくても、デートしたいとか、キスしたいとか、エッチしたいとか思わないものなの？」

まるでマシンガンを向けられている気分だ。香織の一言一言が弾丸となって私の胸を撃ち抜いていく。

「大体さ、大学三年のときの彼と別れて以来、真帆のそういう話って全然聞かないんだけど」

「……だって、それ以来誰とも付き合っていないもん」

「ええっ、嘘でしょー？」

驚きというより悲鳴に近い叫びをもろに受け、私は思わず携帯を耳から離れた。

「香織、声大きいよ」

「だ、だって、もう四年も経ってるのに？」

「うん」

「うん、じゃないって。ヤバイよ真帆、このままじゃ枯れちゃうよ」

もう枯れかけている、と言いかけてやめた。このままじゃ、香織の声はどんどん大きくなっていくばかりだ。

「この人いいなって人、本当にいないの？」

ふっと脳裏にマサキさんの姿が浮かんだけれど、慌ててそれを打ち消す。

「だから、出会いがないんだよね」

「出会い作ればいいじゃん、合コンで」

話が一周して戻ってきた。私は通話口を押さえ、香織に聞こえないようにため息を吐いた。

「……うーん、ごめん。やっぱりやめとくよ。今、本当に忙しくて、余裕ないんだ」

「真帆お〜」

「香織が厚意で言ってくれてるのはわかるんだけど、今はどうしてもそういう気分にならないんだ。だから、他の子を当たってもらえるかな」

「……………」

「ごめんね」

私の本気で拒んでいることを察したららしい彼女は、勢い込んだ口調をリセットするよ

うに少し間をあける。

「まあ、本人にその気がないっていうなら、無理は言えないからさ。別にいいんだけど……」

「うん？」

「真帆さあ、いつも『忙しい、忙しい』って言ってるじゃない？」

「……うん」

「でもさ、仕事って派遣事務でしょ。定時で上がれるだろうし、週休二日だって聞いてたし、何でそんなに忙しいんだろうって思ってる」

「……」

「資格の勉強とかかなーって、皆で話してたんだ」

「……うん、そんな感じ、なのかな」

私が曖昧に肯定すると、香織はふうん、と頷いた。

「ま、それじゃ頑張ってるよ。気が変わったらまた連絡して」

「うん、ありがとう」

「それじゃあね。また落ち着いたらご飯でも行こうねー」

「はい。おやすみなさい」

電話を切るころには、自宅のあるマンションの前だった。

駅から十五分、築二十年という部分に目を瞑れば、オートロック付きの小綺麗な建物で、ゆとりある3DK。住み心地は悪くない。

エントランスを抜けて真っ直ぐエレベーターまで進み、三階のボタンを押す。三〇二号室が我が家だ。なるべく音を立てないように気をつけながら鍵を開け中に入る。玄関のライトをつけ、パンプスを脱いで端に寄せた。

寝ている家族を起こさないよう、忍び足でダイニングに向かう。ストックキング越しのフロアリングが冷たい。

ダイニングの灯りをつけると、四人掛けのテーブルにぼつんと置かれた食事が目に入る。今日の夕食はハンバーグだったらしい。付け合わせの野菜と一緒にラップが被せてあり、「冷蔵庫にご飯があるから、一緒に温めて食べてね」と添え書きがあった。丸みのある、見慣れた母の字。

仕事中は、お酒は飲むけれど物を食べる機会はほとんどないので、いつもならこのタイミングでひっそり食事を取るのだけど、今日はそういう気分になれなかった。

私は食事を仕舞おうと、冷蔵庫の扉に手をかけた。

「あつ」

扉を開けた途端、うまく収納できていなかったらしいジャムや漬物の瓶が床に転がり落ちる。静かな室内で、ガタンゴトン、と派手な音を立てたので、私は焦って拾い上げた。

隣の部屋で眠っている二人を起こしてしまったのではないだろうか。瓶と食器を片付けてから、隣の部屋の扉をそつと開けた。

八畳の部屋の中央に蒲団が二組敷いてあり、それぞれによく似た顔の二人が横になっている。

片方には、暗がりの中でも目元に刻まれた皺の目立つ母が、そしてもう片方には妹の美帆がスースーと寝息を立てて眠っていた。

……よかった。熟睡してるみたいだ。

私はふと部屋の隅に置いてある美帆の学習机を見た。学校指定のバッグと一緒に、体操着袋と、彼女がいつも使っているキャラクターもののバスケットシューズ入れが置いてある。

そうか、部活の日だったのか。この分だと今日のはよほど動いたんだろうな。

「日に焼けたくないから、体育館でやるバスケット部に入りたい」と話していたことを思い出し、そういうことを気にする年になったんだな、とおかしくなる。

私はそつと扉を閉め、自分の部屋に向かった。

中に入って荷物を置くと、ベッドの上で大の字になる。明日と明後日は休みだけど、家の仕事をこなさなくては。掃除や洗濯、買い物。やることは探せばいくらでもある。母の用事も聞いておかないと。

会話の空白を嫌い喉奥に流し込んだウイスキーのおかげで験が重くなる。

一週間、溜まりに溜まった疲れも手伝い、あつさり眠りへと誘われそうになった、そのとき。

『ヤバイよ真帆、このままじゃ枯れちゃうよ』

香織からの厳しい一言が頭を過り、私の意識はまどろみから引き戻された。

自分でも、『ヤバイ』という自覚はあるのだ。だからこそ、他人に言われると不安になり、次第に恐ろしくなって考えること自体を放棄してしまう。

私——有村真帆は、そんな無限ループにハマり始めていた。

うちは女三人家族で、父親はいない。もともと両親が不仲だったこともあり、私が大學生のときに父が事業で失敗したのをきっかけに離婚した。今は連絡すら絶っている。

父は仕事しか頭がない人で、家族とコミュニケーションを取ることはほとんどなく、酷い仕打ちを受けたこともない代わりに、可愛がられた記憶もなかった。

母も仕事をしていただけで、忙しい中でもきちんと私と過ごす時間を取ってくれたので、おそらく父は私に興味がなかったのだ。だから私も、父と離れ離れになると決まったときさえ取り立てて悲しいという気持ちにならなかった。

それよりも悲しかったのは母が事故に遭ったことだ。母は離婚直後に遭った交通事故で足を悪くして、外で働くことができないう身体になってしまった。

キャリアウーマンだった彼女は、その事故により大好きだった仕事を辞めざるを得なくなつた。日々の暮らしにも困るようになったけれど、父から受け取ったわずめの涙ほどの養育費と今までの蓄えを切り崩しながら、在宅ワークで私たちの生活を支えてくれた。

幸いにも私の学費は父が一括で納めておいてくれたので、大学を辞めずに済んだけれど、家計の苦しさは十分に把握していたので、母の助けになればと時間の融通の利く近所のコンビニでアルバイトをした。

就職活動では正社員ではなく、派遣を希望した。特に優れた技術や能力があるわけでもない私は、派遣社員になつて効率よく時間を使つた方がいいと思つたからだ。

当然、友人は福利厚生をしっかりした正社員を希望する子が多く、「どうして最初から派遣に？」と言われたけれど、私は希望を変えなかつた。

私には十二歳の離れた妹、美帆がいる。美帆は母が離婚した当時まだ九歳——小学校三年生、だつたと思う。

母が職を失い生活が一変したということを理解していなかつた美帆。まだ幼いのだが、わかれと言う方が酷だ。私は、美帆に申し訳なく思つていた。

私はさほど苦勞せず、無条件に大学まで出してもらつたのに、おそらくこのままいけば彼女の進学には制限が出てくるだろう。

同じ姉妹なのに、生まれたタイミングが遅いだけで選択が狭まるのは私も辛い。だから、最低でも高校、できれば大学まで美帆が行きたい方向に進めるように、他人より余計に働いてでもお金を稼がなければ……そう思うようになった。

ホステスの仕事に向いているとは思わない。甘えるのは苦手だし、男性と付き合つた経験も乏しい。幼稚園から高校まで女子高だったこともあり、男性というだけで構えてしまうというか、意識してしまうようなところがあつたのだ。

最初は派遣事務の傍ら、バーでウェイトレスのような仕事をしていた。夜に働ける場所はお酒の絡むところが多いけれど、こういう仕事なら私にもやれそうな気がしたからだ。

けれど収入は思うようになかなかつた。終電ギリギリまで働いても、週に何回シフトに入つても時給は変わらない。何かもつと条件のいい仕事はないかと探していたところ、同じバイト先の女の子に紹介してもらつたのが『フェリア』だつた。

話を聞いたときは、銀座で夜の蝶なんて絶対に無理だと思つた。けれどお給料が魅力的だったのでダメ元で面接に行つてみたところ、ちょうどスタッフが足りない時期だつたらしく、

「君、いいねー。品がいいし、笑顔もいい。きっと銀座でウケるよ！」

なんて言われてあつという間に採用が決まり、気がついたら二年。

今日みたいに失敗したり、ちよつと嫌なお客様に絡まれたりして辞めたくなくなるときもあるけれど、いくつかのお店で指名をもらえて、どうにか働いている。

「このままじゃ枯れちゃうよ、か……」

香織の言葉をもう一度口にして、ごろりと寝返りをうった。

もちろん、男の人に興味がないわけじゃない。素敵な人がいたらお近づきになりたいし、いいお付き合いができればいい。と……人並みの感覚は持っているつもりだ。

でもどうしようもない。昼間は事務、夜はホステス、休日は家のこと。それらをこなすのに精一杯で、自分のことは後回しになってしまう。

母は足を傷めて、日常の生活にも支障をきたしている。買い物や洗濯、そして掃除も、身体に負担がかかるところは私の仕事だ。

美帆も手伝おうとしてくれるけれど、学生時代は一度しかない。家のことよりも、彼女には勉強や遊びを頑張ってもらいたい。

『同級生だつてそろそろ結婚し始めてるし、子供を産んでる子だっているんだよ。それなのに、彼氏の一人もいないって悠長すぎじゃない？』

『まさか一生一人でいるつもりじゃないでしょうね』

香織の声がリフレインする。私はもう一度寝返りをうった。

……わかつてる。そろそろ、自分のことも考えなくちゃいけないって。

大学を卒業し、ダブルワークを続けて三年。日々の忙しさにかまけて、気になる男性どころか、友人関係も徐々に希薄になってきている。

『有村さん、やっぱり帰っちゃったんだー。相変わらず付き合い悪いよね』

今日も帰り際に言われてしまったんだ。しょうがない、本当のことだから。

私の職場はほとんどが女性で、比較的正社員と派遣社員の仲もいい。

だから、金曜に皆で飲みに行くなんてこともザラにあるのだけれど、終業時間を迎えても私には次の仕事があるから、その誘いに応じたことは一度もない。

もちろん、参加したくないわけじゃない。お酒を飲んだり会話を楽しんだりするのは好きだし、職場の人も皆いい人だ。

だけど、今、仕事を減らすわけにはいかない。

そんな付き合いの悪い私に懲りずに構ってくれる香織はありがたい存在だけど、彼女もそのうち離れていってしまうかもしれない。このままだと本当に独りになってしまうんじゃないだろうか。

………たまたまに、同年代の友人が羨ましいと思うことがある。

オシヤレに時間をかけたり、オールで盛り上がったたり、彼氏とデートしたり、趣味に熱中したり、習い事をしたり。やってみたいことは幾らでもある。

でも、私が今、一番やらなければいけないことは、家族を守ることだ。

脳裏に母と妹の顔が浮かんだ。心配をかけたくなって、二人にもダブルワークのことは秘密にしている。

残業があるという私の嘘を信じ、遅く帰ってきてても必ず食事を用意しておいてくれる優しい母。

運動が好きだから、とスポーツ推進校の私立に興味を示している中学一年生の妹。

母を助けない。妹に苦労をさせたくない。その思いだけが、今の私を支え、動かしている。せめて美帆が高校を卒業するまではできる限り頑張らないと。

私自身のことはそのあとでいい。

『……あのねえ真帆。あんた今いくつだと思ってるの?』

そう思ったとき、香織の呆れた声が聞こえた気がした。

私は今、二十五歳。美帆が高校を卒業する年には……三十歳、いや、三十一歳になる。改めて認識すると結構、ううん、かなりシヨックだ。

三十一。確かに、最近では婚期が両極化していて晩婚の人たちも珍しくないけれど……その年から相手を探して、間に合うのだろうか。

ただでさえ私の環境は出会いが少ないし、年齢を重ねれば重ねるほど女性は不利になる。香織の言うとおり悠長にしている場合ではないんじゃないだろうか。

急に深刻に思えてきた私は、盛大にため息を吐いた。

なるべく考えないようにしよう。そう思っていたのに……一度心に留まってしまうと、それが焦燥感となって重くのしかかる。

——ふと、マサキさんのことを思い出した。

彼はどういふつもりで連絡先をくれたのだろう。お金が一番大事だなんて、まるで守銭奴みたいな卑しいことを口走ってしまった私に。

「何となく、に決まっているじゃない」

自惚^{うぬぼ}れてるんじゃない、と自分に言い聞かせる。きっと気まぐれだろう。あれほどの人が私に声をかけるなんて、それ以外考えられない。

あ、でもそういえば……

『レイナさん、あなたと大事な話がしたい。ご迷惑でなければ連絡をください』

私の記憶が合っていれば、たしか彼はこんなことを口にしていた。

大事な話——それを、会ったばかりの私に?

私の頭の中は疑問符でいっぱいになる。何故彼はそんな風に……

ナンパの手口だったとか?

でもそうだとしたら、こんな大げさな理由は必要ないはずだ。ただ単に、番号を渡すだけで済む。

……妙に、引つかかる。

いずれにしろ真意はマサキさん本人しか知り得ないのだけだ。

「……………」

それなら、いつそ訊いてしまおうか。なんて気持ちが頭をもたげる。

わざわざ向こうから番号を差し出したのだから、かけて迷惑ということはないだろうし、その大事な話とやらだけ聞いて電話を切れればいい。そうしたら、もう彼のことを考える必要はない。

大体、これが本当に彼の携帯番号なのか……もつといえ、実際に存在する番号であるのか、それさえ定かじゃない。確かめるには、やっぱり行動を起こしてみるしかないのだ。

我ながら強引な理屈だとも思ったけれど、あえて無視を決め込んだ。

ベッドから起き上がり、通勤バッグの中から仕事用のポーチを取り出す。その中から、先ほど仕舞いこんだメモ用紙を引っ張り出すと、十一桁の番号を携帯電話に打ち込んだ。時刻は深夜の一時過ぎ。非常識な時間帯かとも思ったけれど、この勢いを借りなければ行動を起こせない。明日は多分休日だし、とか、私がホステスだと知っているんだから電話をかけるとしたらこの時間になってしまうのは承知の上だろう、とか自分に言い訳をする。

全ての数字を打ち終えると、私はベッドを椅子代わりにしながら、メモを傍らに置いて左胸を手で押さえた。次第に鼓動が速まってくる。

お店に黙ってお客様に連絡をしているという背徳感からなのか、ただ単に好みの男性と接触しようとしているからなのか、もしくはその両方なのか。

意を決して通話のボタンを押した。電子的な呼び出し音がさらに緊張を高めていく。

もう寝てしまったのかなと諦めかけたところで、急にブツツと何かが途切れる音がして、

「もしもし」

……と、つい数時間前に聞いたのと同じ、優しげで落ち着いた声音が届いた。マサキさんだ。

「あ、あの……もしもし」

情けないことに、私の声は震えていた。これではいけない、と一呼吸置いてから、

「こんな時間に申し訳ありません。私、先ほど『アンジュ』で一緒にさせていただいた、レイナです」

はつきりとした口調でそう告げる。

「ああ、レイナさんですね。いいえ、大丈夫ですよ。お電話をただで嬉しです」
マサキさんは私だとわかると、少し安堵したようなニュアンスを織り交ぜ、お店のときと変わらぬ言葉遣いで続けた。

「もうお仕事は終わりましたか?」

「はい、ですのでお電話いたしました——こんな時間ですので、失礼かな、とは思ったんですが」

努めて冷静であろうとするものの、電話の向こうに彼がいると思うと肩に力が入って、さつきと同じようなフレーズを言い訳がましく口にしてしまう。

「いいえ、早くにご連絡いただけで助かります。お店の手前、あのような方法しかなかったもので、不審がられないか気を揉んでいましたよ」

冗談っぽく笑いながら彼が言った。あのような……というのは隠れて番号を渡したことでだろう。

早速、「大事な話」について訊きたいけれど、こういうのってどう切りだしたらいいんだろう。「大事な話って何でしょう?」なんて、単刀直入に訊くのは失礼だろうか。

ほんの一分前まではズバリ訊いてしまう気満々だったけれど、いざこうして彼とコンタクトを取ってみると、弱気になってブレーキがかかる。

「レイナさん。お電話をくださったということは、僕の話に耳を貸してください、ということでしょうか?」

私の気持ちを察してくれたのだろうか。マサキさんの方から話をふってくれた。「は、はい。お話があるとのことだったので……」

「ありがとうございます。……ただですね、お電話で伝えるのは少々難しい、デリケートな話なんです」

「え?」
「ですから、後日改めて、ゆっくりお話をする機会をいただければと思います。いかがでしょうか?」

想定外の事態に、私は言葉に詰まった。これって、つまりどういうことだろう。

ナンパにしては回りくどい言い方だ。かといってただのホステスと客が日を改めて慎重にする話なんてあるのだろうか……?

「ええと、あの……」

「すみません、いきなりそんなことを言われても困りますよね。怪しいと思われるのも当然ですが、あまり警戒しないでいただきたいのです」

彼自身、自分の言っていることが不自然であることを理解している。そんな言い方だった。

「とにかく、あなたと一度ゆっくり話をしたい。ご迷惑でなければ、是非」

「……………」

「レイナさん?」

私は揺れていた。これが警戒するべき状況であるのはわかっている。どう考えても釈

然としない話だ。うっかり誘いに乗れば変なことに巻き込まれ、厄介な目に遭う可能性だつてある。

けど——自分でも不思議だった。今は、疑わしい気持ち以上に、彼の話を聞いてみたい。聞くだけならいいじゃない、という気持ちが勝っている。

いい年をして恥ずかしいけれど、この展開に何か運命的なものを感じていたのかもしれない。

「……わかりました。あなたを信じます」

まるで見えない糸に引き寄せられるようにそう答えていた。

「ありがとうございます、レイナさん。本当に、ありがとうございます」

彼は電話越しに頭でも下げているのではないかと思うくらいに丁寧なお礼を言ってから、早速日取りの相談に入った。

まさかその先に、好奇心では片付けられない一大事が待っているなんて、思ってもみなかったのだけれど——

2

マサキさんとの約束は一週間後、土曜の午後二時。

待ち合わせ場所として指定されたのは東京駅のすぐ傍にある、最近できたばかりの真新しいホテル。そのロビーだった。

オープンしたときに話題になっていたので名前こそ知っていたものの、自分の生活には係わりのない場所だという認識があり、足を運ぶのはおろかホテルの入り口に立つのも初めてだった。

ロビーは二十八階で、バーラウンジに直結しているらしい。天井に小さいながらも精緻なシャンデリアが吊られたエレベーターで上昇すると、扉が開いてすぐのソファにマサキさんは座っていた。慣れない場所だから時間がかかってしまうかとも思い、余裕を持ってやってきた私より、ずっと前に来ていたことになる。

マサキさんは私が現れたことを知るとすぐに立ち上がり、深々と礼をしてから、爽やかな笑顔で口を開いた。

「先日はどうも。よくいらしてくださいましたね」

「お……お久しぶり、です」

笑顔を返したつもりだけど、緊張からくる顔の強張りこわばりは隠せていないかもしれない。彼の装いはスリムなブラックのスーツに、ブルー系のシャツとネクタイ。先日もそうだったけれど、知的な印象でよく似合っている。

「素敵なワンピースをお召しすね」

彼も私の服装に注目していたようで、温かみのある笑みを湛たえたまま、そう言ってくれた。

「……ありがとうございます」

ストレートに褒められた気恥うづずかしさから、ついつい俯うつむいてしまう。

こんなかしこまったところに来る機会なんてないから、クローゼットの中身をひっくり返す勢いで服を選んだ。可愛らしい服にするべきか、大人っぽい服にするべきか、定番モノか、トレンドか……

色々と悩んだ末に、以前アウトレットで購入したグレーのバーバリーチェック柄のミニワンピースにした。落ち着いているけれど可愛い印象もあるし、身体のラインが綺麗に出る。私の持っている数少ないハイブランドのものだ。

「それでは、部屋の方に参加しましょうか」

「え？」

さも当たり前のように切り出されて耳を疑った。てつきり目の前のラウンジに入るものと思ひ込んでいたからだ。

「部屋……それって……？」

「三十六階に部屋を取っています。チェックインは済ませてありますので、早速参りましょう」

「あの、待ってください」

私は不躰ふしつにならない程度に強く言った。たった今背中を見せた彼が再び私に向き直る。「その、さすがにまだそういうのは早い……んじやないでしょうか……？」

もしかしてこれが彼のやり方なんだろうか。誘えばすぐに乗ってくる女だと思われているのだとしたら心外だ。そんな軽率な関係を望んではない。

……正直に言っていると、彼に興味がないわけではないけれど、そういう目的であれば引き返すつもりで抗あがってみる。

疑う私の一、二メートル先で、彼は柔らかに微笑んでいた表情をきりりと引き締める。私が見えないうつらな様子を見せたことで合点あてがいったようだ。

「……ああ、これは失礼致しました。そういう誤解をされても仕方がない状況ですよ。でもご安心ください。あなたに無礼な振舞いは何一つしないと誓います」

彼はそう言うのと、再び私に背を向け、ロビーのデスクへと足を進めた。

立ち読みサンプルは ここまで